

2024年姉妹都市交流40周年記念・秋田の思い出

執筆者

アルミン・ディックル



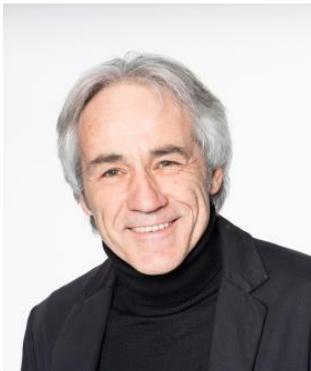
1982年生まれ。独立経営コンサルタントを経て、2013年にはValueNetコンサルティングのマネージングディレクターに就任。2008年よりバイエルンの地域政党であるキリスト教社会同盟（CSU）のパッサウ市議会議員、2020年からはパッサウ市の若き第3市長としてドゥッパー市長をサポートする。2024年には公式訪問団代表として初めて姉妹都市秋田を訪問した。

ノルベルト・パルサ



1956年生まれ。パッサウ大学卒業後、ミュンヘンのバイエルン州立銀行（BayernLB）グループに30年間勤務。BayernLB 東京事務所代表として、1988年5月から1995年8月まで日本で生活した。銀行取締役を退職後、2019年1月7日より独日協会会長を務める。東京で暮らしていた頃に北海道に旅行、その際秋田を通過したことはあったが、秋田市を訪れたのは2024年が初めて。

フリッツ・ゲアストゥル



1957年生まれ。大手スーパーマーケットやパッシブハウスなど、ドイツ全土で多数の建造物を手がけてきた建築家。2020年5月1日より、ドイツ社会民主党（SPD）のパッサウ市議会議員として精力的に活動している。2024年の交流事業で初めて日本と秋田を訪れた。プライベートでは熱いギタリストでもある。

クラウス・ディッテ



1960 年生まれ。1986 年から 2 年間写真を学び、1989 年にフリーランスの写真家として独立後、アート写真や宣材写真など様々な作品を手がけてきた。2009 年にはスタジオを構えていた故郷バーデン＝ヴュルテンベルク州からパッサウに移住。秋田・パッサウの姉妹都市交流に関わる以前にも日本を旅したことがある。好きな音楽はジャズ。

ミヒャエル・ベック



1964 年生まれ。1990 年にはパッサウ教区の教会吹奏楽団の顧問に任命され、94 年からは自ら創設した金管アンサンブルを指揮。ヨーロッパを中心に多数のオーケストラで演奏する他、ソロとしては 2010 年に秋田と金沢でコンサートを行った。二度目の来秋だったが、毎回リハーサルに明け暮れてプライベートの時間が全く取れないため、次は個人旅行で秋田に向かうべく日本語を勉強中。

「秋田旅行記－パッサウと秋田の姉妹都市交流 40 周年を記念して」

パッサウ市第三市長兼姉妹都市交流 40 周年記念訪問団団長

アルミン・ディックル

2024 年の 8 月、私はパッサウ市第 3 市長として、姉妹都市提携 40 周年記念式典に向かうパッサウ市公式訪問団を率いるという栄誉に浴すことになった。この訪問は私自身にとっても、全ての訪問団員にとっても、温かさ、おもてなし、そして素晴らしい文化に彩られた、とても感動的な経験となった。

秋田に到着したあの時、私たちのパートナーシップを秋田の皆様がどれほど大切に思っているかということがはっきりと伝わってきたのを覚えている。秋田市役所での歓迎は大変温かく、私たちが庁舎に足を踏み入ると、職員の方々が拍手で迎えてくださった。この瞬間、鳥肌が立つほど感動したことを、決して忘れることはないだろう。その後、秋田市の穂積志市長と非常に友好的で親しみの念に満ちたやり取りをすることができた。市長会談の恭しさにもかかわらず、率直かつ内容の濃い対話が交わされ、互いへの敬意と感謝の気持ち、そして両都市のパートナーシップを祝うだけでなく、ここに新たな息吹を吹き込みたいという共通の願いが確認された。



その後の数日間は公式レセプションや会合に数多く出席し、両都市の強い絆を様々な形で体験させていただくことができた。そんな中、とりわけ感銘を受けたのは、秋田の皆様が私たちが気さくに受け入れ、心温かく接してくれたことであった。

私にとっての文化的なハイライトは、やはり何と言っても世界的に有名な竿燈まつりの観覧である。地元秋田の差し手たちが何メートルもある竹竿と数十個の提灯を、信じられないほど軽やかに、バランスよく操る芸術的なパフォーマンス、そし



てこの祭りが街全体に解き放つエネルギーには、本当に心を揺さぶられた。伝統の力強さと人々の故郷との強い結びつきを鮮やかに物語る一夜であったと思う。

これらの公式プログラムに加えて、アーティストや学生、市民社会を代表する方々と個人的に交流する機会も得られた。このような交流を通して、都市間のパートナーシップがいかに重要で貴重なものであるかということに改めて実感するに至った。都市間パートナーシップは、文化の架け橋となり、相互理解を促進し、人々が互いに学び合うことを可能とするものだ。特に、

国際交流がこれまで以上に重要になっている現代において、その重要性は計り知れないであろう。そんな中、熱心なアマチュアシェフとしての私にとって最も印象深かったのは、和食教室に参加できたことだった。結局のところ、おいしいもの以上に人々を結びつけるものなどあるだろうか？

とりわけ穂積市長には、そのオープンな姿勢、先見の明、そして個人的なコミットメントによって、私たちのパートナーシップを活気に満ちた形で継続するための道筋を示していただいたことに、心からの感謝を申し上げたい。私たちの会談が、互いへの感謝に満たされつつ、特に青少年および文化交流における新たな形での協力関係の構築を共通の目標と定めることができたのも、穂積市長のおかげである。

たくさんの感動と豊かな出会い、そしてさらに深まった友情を胸に、私たちはパッサウに戻ってきた。パッサウと秋田の40年にわたるパートナーシップは、私たちにとって大きな贈り物であると同時に、未来へ向けて積極的に活力を与えていくという任務そのものでもある。この道を、皆様とともに歩み続けられることを楽しみにしている次第である。

「秋田日記－パッサウ・秋田姉妹都市交流 40 周年記念訪問団旅行」

パッサウ独日協会会長

ノルベルト・パルサ

およそ 2 年間の準備期間を経て、2024 年の 8 月 4 日、ついにその時がやって来た。パッサウ市の代表者およびパッサウ独日協会会員からなる 39 名の訪問団は、アルミン・ディックル副市長を旗頭にウィーンから東京を經由して秋田へと向かい、8 月 5 日



の正午頃に秋田到着。8 月 5 日（月）から 8 日（木）までの秋田での日々は、イベントで埋め尽くされていた。全行程約 24 時間の長旅を終えて秋田空港に到着すると、秋田日独協会と秋田市役所の職員の方々が私たちを出迎えてくれた。その後、秋田公立美術大学のカフェテリアで昼食をとり、この素晴らしい美術大学の見学とワークショップが行われた。

この日の午後には、有名な蓮池のすぐ隣にある秋田キャッスルホテルにチェックイン。秋田滞在中、私たちは蓮の花が満開に咲き誇る様子を目の当たりにする貴重な機会に恵まれた。これほど大きく、そして無数の蓮が咲き誇る様子は、日本だけでなく、私がこれまで幾度となく訪れたアジアのどの場所でも見たことがなかった。まさに、活気あふれる秋田ならではの華やかな光景だ。



その夜、美しい千秋公園内のレストラン「千秋亭」にて、秋田日独協会主催の盛大な歓迎会が開かれた。おいしい夕食と銘酒に加え、この夜のハイライトは「男鹿っ鼓」のなまはげ太鼓、そして日本とドイツの歌の合唱だった。楽しく忘

れがたいこの夕べが、秋田の友人たちの素晴らしいおもてなしと結束力についての鮮烈な第一印象を私たち全員にもたらしたと思う。

翌日の8月6日、私たち訪問団は秋田市役所で穂積志市長に迎えていただいた。市役所に到着し、職員の方々が玄関ホールとバルコニーから割れんばかりの拍手を送ってくれるのを見た時は、こんなにも温かく出迎えてもらえるのかと信じられない思いであった。庁舎内と市役所前の友情の鐘の前で記念撮影をした後は、市議会議員のルールについて説明を受ける時間があった。その中で特に印象深かったのは、若い議員が議会前列に座り、より長く在任している経験豊富な議員は後列に座るというものであった。



また、秋田市役所訪問にあたって、穂積市長にはパッサウの青少年からの特別な贈り物を届けることができた。それは、パッサウのインシュタット小学校、ギゼラ・ギムナジウム・ニーダーンブルク、ギムナジウム・フロイデンハインの生徒たちが、日本への思いやパッサウと秋田とのパートナーシップをテーマに描いた絵が収められたアルバムだった。この素敵な贈り物を企画・実現させた当協会のシュテフェン・ヴンシュマンと永井千里が、穂積市長にアルバムを手渡した。



おいしいビールとおつまみで腹ごしらえをした私たちは、この日、世界的に有名な竿燈まつりを体験することとなる。毎年8月初旬の4日間、人口31万人を超える秋田市で開催されるこの祭りには、約150万人の観光客が訪れるという。

この夜、参加者全員が、日本でも秋田でしか経験できない、特別で忘れられない時間を過ごした。穂積市長が祭りの始まりを告げ、私たち全員を行列の先頭から観覧席まで連れて行ってくれた。そこでは、提灯の下がる竿のバランスを取るアクロバットと、リズミカルな笛や太鼓の音色を間近で体験することができた。



8月7日には、三つの大きなイベントが私たちを待ち受けていた。

午前10時、写真展「FLOW/GLOW」の開幕：

秋田出身の写真家である草彌裕氏とパッサウ出身の写真家クラウス・ディッテが、穂積志市長とアルミン・ディックル副市長



とともにオープニングバナーをカット。続いてアーティストたちによる展示ツアーが行われ、主賓や多数の来場者に作品の説明がなされた。草薨裕氏とクラウス・ディッテは、ほぼ全ての写真について、その写真にまつわる自身の個人的な経験を語ってくれた。2人はこの展示のために互いの姉妹都市を訪れ、2023年の9月、14日間にわたって素晴らしい写真作品を制作していた。



午後2時：

満席となったアトリオンコンサートホールで、ミヒャエル・ベック率いるバタバラス（ホルンのカリナ・サウアー、トランペットのミヒャエル・ラコタ、トロンボーンのコスタンティン・キュメルシュ、チューバのハンス・アイブル）と、アトリオン少年少女合唱団および秋田市民合唱団による合同コンサートが聴衆を魅了した。



午後6時、秋田キャッスルホテルで秋田市主催の姉妹都市交流40周年記念式典：



写真は、穂積志市長が和やかに祝辞を述べられる様子、そして訪問団の代表と芸術的で優雅な舞を披露する若き舞妓さんたち。

おいしいフランス料理と日本酒で有名な秋田の素晴らしいお酒を堪能しつつ、親睦を深めた夜だった。穂積市長の御祖母様のお家だという酒蔵の日本酒は特に好評だった。残念なことに、この日は翌朝の出発を控えた最後の夜だったので、私たちはすでに別れを惜しみつつ、2029年にパッサウで再会し、姉妹都市交流45周年とともに祝うことを考えていた。

この度の秋田滞在は、私にとって初めての姉妹都市訪問であった。緑豊かで近代的な街並み、人々との素晴らしい出会いの数々、そして忘れられないおもてなし。これらの経験を通して、私は日本をより身近に感じることができた。東京で働いていた7年間よりも、秋田ではより深く、そして違った視点で、日本と人々を知ることができたように思う。東京は確かに偉大で興味深い国際都市であり、世界最大のメトロポリスとして、他のグローバル都市と共通する特徴を持っている。東京は東京であり、本当の日本ではないと言えるかもしれない。本当の日本は、秋田の街とそこに住む人々と同じように、美しく、これほどまでに体験する価値があり、私の記憶に残り続けるものだと思う。

「旅の始まりは……」

パッサウ市議会議員

フリッツ・ゲアストウル

予想通りの長旅で疲れはあったが、私たち一行は最高にご機嫌で、皆が面白い旅になることをとても楽しみにしていたので、疲れを乗り切るのは造作もなかった。ついに秋田に降り立ち、これまでに経験したことの無いほど温かく迎えられた私たちは、まずバスに乗り込んだ。そうして初めての秋田から受け取る第一印象を各々集め、昼食をとり、まるで30時間ほど歩き続けたかのように思われた後、午後4時頃にホテルに到着。部屋でシャワーを浴び、新しい服で少し休んでから、午後6時に日独協会主催の歓迎会に向かう。その予定だった。

だが、スーツケースの鍵が開かない。ホテルの受付の人に手伝ってもらっても、どんどん重くなっていく工具を使っても、結局開けることができなかった。これはもうプロに頼むしかない。キャッスルホテルの人がインターネットで鍵屋を探してくれたので、私はスーツケースを抱えてタクシーで出発した。

全くの異国に着いたばかりで右も左も分からない私にとって、これは文字通りの大冒険だった。工業団地に到着してしばらく経っていたにもかかわらず、鍵屋を見つけるのは至難の業であった。しかし、タクシーの運転手があちこち尋ねて回ってくれた後、私はようやく、高い棚が並ぶ、照明の乏しい、狭い店に立っていた。少し居心地の悪さを感じつつも、私は奥のホールからやってきた店員に、おそらくひどく狼狽した様子で、スーツケースの鍵をガチャガチャさせることで自分の問題を説明した。彼はうなずいて姿を消し、工具と2人の助っ人を連れて戻ってきた。興味津津といった様子の助っ人たちは、これは私の推測でしかないが、おそらくたくさんのアドバイスを送りながら、最初の店員の作業を見守っていた。

しばらくすると精密工具を携えたさらにもう一人の店員が呼ばれ、そしてついに、鍵がパカッと開いた。このプロの「泥棒」は、その英雄的行為の目撃者たちから一斉に称賛を受け、背中を叩かれていた。

さて、今度は私が身振り手振りでお礼を言い、勘定を頼み、その名刺をしっかりと握っているタクシーの運転手を呼んでくれるようお願いする番だ。何しろホテルに

戻らなければならないのである。そしてこの時、ストレスで汗だくになり、疲れ果て、無力な中央ヨーロッパ人である私を完全に圧倒する出来事が起こった。彼らは私からお金を受け取ろうとしなかつただけでなく、あろうことかこの鍵屋のヒーローは、彼の母親に私をホテルまで送ってほしいと言い出したのだ。彼自身は竿燈に行かなければならず、時間がなかったのである。

こうして、開いたスーツケースと幸せでゆったりとした気分を抱えた私は、一人の年配の女性に、時間通りにホテルまで連れて行ってもらった。幸い、ノルベルト・パルサと電話で連絡を取ることができた。ノルベルトは親切にもホテルの外で待っていてくれ、私を連れて来てくれた彼女の言葉でお礼を言い、よろしくと伝えてくれた。

日本に到着したばかりで、最初は大きな困難として立ちは大かったこの出来事にとても感激し、この国と人々に心を奪われた私は、目を見開いただけでなく、心を開いて残りの旅を体験し、楽しんだ。

日本への旅を思い出す時、いつも秋田でのこの話がまず最初に頭に浮かぶ。今でも素晴らしい思い出で胸がいっぱいだ。



「2024年・パッサウ市とパッサウ独日協会の秋田訪問記」

写真家

クラウス・ディッテ

私にとってはすでに2023年が特別な年だった。パッサウ独日協会とパッサウ市のための写真プロジェクトを実現するという荣誉に恵まれ、秋田の友人たちの素晴らしいおもてなしと親愛を満喫することができたのだから。同僚であり友人でもある草薙裕さんとの出会い、添野家の温かな歓迎、そしていつも私を歌わせてくれた川村さんと渋谷さんの明るさと親切さ、疲れ知らずの助っ人野村さん、温泉のスペシャリストであるカズエさん、杉本さん、伊藤家の皆様、高田さん、さらには石川さん、コーさん、ショウタ君とコウタ君といった信じられないほど献身的な役所の協力者との出会いは、私に深い感動を与えてくれた。

そして2024年の8月、とうとう私たちの仕事の成果を披露する時がやって来た。

秋田空港に到着すると、まるでロックスターのように迎えられた！私は2023年に知り合った友人たちと再会できた喜びで胸がいっぱいだった。初日の夜は、美しいレストラン「千秋亭」で素晴らしい夕食をいただき、なまはげのパフォーマンスと合唱を心ゆくまで楽しんだ。ここでまた、友人たちに囲まれて祝杯をあげられるあの幸せな気分が蘇ってきた。



一連の記念行事はまさに輝かしいものであった。秋田市役所訪問では、職員の方々から拍手喝采を受け、その後、穂積さんに庁舎の神秘的な深奥へと案内していただいた。まさにここでしかできない体験！

そしてその夜、竿燈まつりへの期待が現実のものとなる。祭りに向かう前にとっても「ギルド的な」ビアホールに行ったのだが、やはり彼らはビールの醸造方法を熟知していて、日本のビールはバイエルン人にとって本物のライバルである！竿燈まつりは、喜びと笑い、アクロバットと美学、そして熱狂に満ちた忘れられない夜であった。本当にありがとう！

ここからは裕さんと私にとっていよいよ本格的な見せ場だ。展示のオープニングが近づき、裕さんと彼の同僚の石川さんが秋田市文化創造館で成し遂げたこと、つまり完璧な名人芸としての展示を、私は初めて目にすることができた。とても誇らしい気分だった。展示は穂積市長とアルミン・ディックル副市長による厳粛な式典で開幕し、大変好評を博したことを嬉しく思う。その後の食事会では、川村さんに護身術を教えていただき、また一つ楽しい思い出ができた。



さらに感動は続く。バタバブラスと少年少女合唱団のコンサートでは涙が溢れてきた。コンサートホールを間違え、危うく見逃してしまうところだったのだが、この日は素晴らしい午後を過ごすことができた。

翌日の秋田キャッスルホテルでの式典は、盛大な祝賀行事の締めくくりにふさわしいものだった。今回もまた、出された料理はまさに最高級のもので、私は秋田で（おそらくフランスを除けば）どこよりも美味しいものを食べ、飲んだと言わざるを得ない。秋田には最高の日本酒があると思う！（もはや日本酒中毒になりかけているところだ。）

パッサウ市訪問団が東京へと出発した後、秋田に残った私は、友人の裕さんから特別な贈り物をいただいた。裕さんが奥様のアキさんと一緒に、ハイケと私を鳥海山と滝に連れて行ってくれたのだ。数えきれないほどの見どころ、素晴らしい会話と体験に満ちた特別な一日となった。



そうなのだ、秋田、日独協会の皆様、私を助けてくれた方々、おもてなし、明るさ、献身、親切さ、信じられないほど美味しい料理、そして友情に、深く感動しているのだ。秋田での出会いとそこから生まれた友情は、私の人生にとってかけがえないものとなった。皆様、心から「ありがとうございます」！

「2024年・バタバブラスの秋田旅行記」

バタバブラスリーダー

ミヒヤエル・ベック

そもそも私の秋田旅行記は、独日協会会長のノルベルト・パルサから、バタバブラスとともに姉妹都市交流40周年記念事業の一環として秋田へ行かないかと打診された2023年に始まる。この時私には思い悩む必要などなかった。というのも、私は2010年、マティアス・エドラー・フォン・ポラックとペーター・フォイツとともにすでに秋田を訪れていた。穂積市長に歓迎していただいたこと、秋田日独協会主催のパーティー、とても親切にしてくださったホストファミリーの渡辺さん、秋田市役所で常に窓口となってくれた辻さん、秋田で恵まれたたくさんの出会いと交わした言葉、これらの素晴らしい思い出が鮮明に心に残っていたのである。あの秋田にまた行きたい。心からそう思った。

この旅行記を書いている2025年の春現在、すでに秋田に行ってから約1年が経っているわけだが、あの夏秋田で過ごした時間は今思い出しても感動的だ。今回、秋田市民の皆様のために良いコンサートができるよう、そして私たちの秋田滞在が快適なものになるようにと、秋田市役所の皆様、窓口となってくれた石川樹里さん、そして姉妹都市交流事業に関わるたくさんの方々が細部に至るまで綿密な準備をしてくださった。それはすでに秋田駅で出迎えてもらった時に私の心を打った。私たちはまるでポップスターになったかのような気分だった。何もかもが完璧にオーガナイズされているのである。私たち音楽家と楽器のための専用車も手配され、市役所のウェイ・ユン・コーさんが引率してくれた。彼女はいつも私たちのそばにいて、新しい環境に慣れることができるよう、そしてコンサートの準備に完全に集中できるようサポートしてくれた。



そのおかげもあって、パッサウ市訪問団が参加する公式プログラムの一部を体験する機会にも恵まれた。それは、歓迎パーティー、伝統的な竿燈まつりの観覧、秋田市役所の訪問、そして秋田市がパッサウ市訪問団を招待してくれた記念式典などだ。中でも、慌ただしかった秋田滞在の最終日、素晴らしい料理と日本酒をご馳走になった秋田市主催の式典は、私たちにとって特別な意味を持っていた。バタバラスとしての仕事が無事に完了した安堵感に包まれながら秋田の銘酒を堪能したあの晩のことを、決して忘れることはないだろう。



秋田の音楽家たちとのコラボレーションは大変貴重な交流であり、今回も多くの素晴らしい人々と知り合うことができた。アトリオンコンサートホールの藤原さん、司会の柳本雪絵さん、秋田市民合唱団の皆様、オルガニストの小松真由美さん、ピアノ伴奏の小澤叶恵さん、作曲家の阿部俊祐さん、素晴らしい指揮者である神足有紀さん率いるアトリオン少年少女合唱団の皆様、そしてもちろん、パッサウ在住で、自身の故郷秋田と三河川の街を繋ぐチャーミングな技術翻訳者の永井千里さん。あの日私たちは、立派なコンサートホールの舞台上で、熱心に聴き入ってくだ

さるお客様を前に、感動的なコンサートを成し遂げることができた。バタバブラスは、この素晴らしいコンサートの開催にご尽力くださった全ての関係者の皆様に心よりの感謝を申し上げますとともに、今後はパッサウでも、秋田の人々との素敵な出会いに恵まれる機会があることを願っております。



翻訳・構成：永井千里